

合もねばらずちようど我聲相當にばんじ作らず、輕妙に語るをよしとす。附けて云時代世話と云ふ事あり、前に述ぶる意を折衷して語るべし。

○道行 とは即ち淨瑠璃中旅行の段にて、文章の多くは地合を以て充されたるが多ければ、萬事花々しく語るべき物なれば、必ずシテワキツレと數人にて語る、是等はあまり素人にて語らねども、もし語るべきあればワキツレはシテの聲に障らぬやう、つけふしの連絡に間の隙かざる様、少しシテの跡よりうみ字の引張りに注意をせし。

○景事 此れとても粗ば前の道行に似たる物にて、見物の眼界否耳底を洗ふが如く、總而の陰鬱たる感じを一掃するの目的にて、必ず一日中の最後に演ずる物なれば、矢張り花々しく面白く前全様の注意を以て語るべきものとす。

○ちやり 予淨瑠璃稽古中ちやりと云へる言辭の起りを尋ねたるに

ちやり場と云へるは即ち闇梨場と云へる言辭の轉訛にて、嘗て河内太夫和田合戰鶴が岡阿闇梨手負の振りを以て追人を欺むくの文章ふしの配合至極輕妙にて、見物の頤を解くが如き妙味ありしかば、夫より文の面白き節の輕妙滑稽と糾らす場をちやりと唱へ來るとや、うれは扱ちやり即闇梨場を語らんとすれば、我より笑ひかゝるべからず又取つて附けたるが如き苦しさ笑ひを以て、聞人を笑はせんとするは策の淺果敢なき限りにて謹しんで情を語るを以て自然な笑は引出さるべしとや、よく心を落し附けて考ふべし。

第五章 老幼貴賤氣持の事

以上は淨瑠璃を語るに附て其大体の心得を記したるものなれば、先づ充分會得あるべし、是より時代世話と其人物によつて發する言氣の心得を豫め摘んで其主なる物を擧げんに

○殿上人 とは親王公卿の如きを云ふなり、即ち中將姫古跡の松の豊

成廣嗣の如き又大塔宮坏かなに殿上人と雖も夫々位の下あつて、人の善悪性の健柔にもよれり等しく同様には参らねども、先づ音聲は高尚にして品格を失しあはず、又皴枯れたる濁音はうつらず、總而かとなしく優美に語るべきものとす

○大將 とは即ち羽柴久吉の如き義經の如く又頼朝の如きを云ふ、粗ば殿上人に同じと雖も、直接に戦軍に接するなれば、優美高尚の間に言ふに言はれざる猛勇の氣韻なくて、叶はず、又寛仁大度の趣きあつて、行義正しく威風凜然と語るべき物なり

○猛將 とは日向守光秀四方天の如を云、三軍を叱咤するの勇氣あつて音節も先づ荒く萬事に屈托せぬ氣込備はらざれば不都合なり、先づ軍物語を語らんとすれば、腹力充分あつて何段語るも呼吸の余裕ある位にあらざれば、腹すべし、病にあき事は語らぬがまし也

○手負 忠臣蔵の勘平太功記の重次郎共、手負なり、然ども一方は自

ら切腹し重次郎は戦争に依つて手を負ひたるなり、よろしく心得ざるべからず、然ればおんせい乱れて附く息きのみにて抑揚如何にも苦しげなるはよけれど、あまりハア／＼と急がしく續け様に言ふべからず、過ぎたるは不及が如しとは此事也、却つて本人が苦しい様聞へて見苦しきものなり

○修羅 とは一段の内戦争場或は切合場なり、矢叫の聲太刀打つ音天闇く地裂け坤軸も碎くる斗りの形容、目前に顯れ来るれば、余程腹帯をめぐりて語らねばならず、得て急き込んで絶句するものなり、口に急いで腹に順序を定め沈着て語るべきもの也

○物語 とは一の谷の熊谷布引の實盛の如き、既往の因縁に形容を加へて語る物なれば、語り人自身も膽を臍下に落附け言辭乱れざる様、發音清しく充分解る様、謹んで聲高く語るべきものとす

○酒の酔 とは九段目の由良之助の如き、五斗兵衛の如き、通常の酒の

酔とは異なり淨瑠璃の酒の酔は夫々腹に一物あつて中々油斷も透きもあらぬ酒の酔なれば語るにも其心得なかるべからずよく聞人に言葉の解かる様初め儘かに尻口呂律乱れたるが如く少々巻舌を加へて自分も酔ふた氣持に語るべきものなり

○どもは常に自分が交際する内にどもの人あるべし習ふたるどもに加味して實況を寫しなば至極妙なり尤引どもつきどもの別あれども先づ通例いひ出しを言ひ掛けるとすらく口早に言切るものなり注意してせいと混せぬ様すべき物也

○馬鹿は時雨の炬燵の三五郎杯にて取締なき内何んとなく心切あつて馬鹿理屈も言ふ物也舌を下あでにびつたり附けて口を開いてすあほらしく軽くどんきように語る物とす

○老人男女貴賤各其趣きを寫して岩頂あるありすなほなるあり人物の性質に依つて各心を込めて語るべきものなり

○女房世話ども時代ども女の情あふるゝ斗り物優しく貞節の心底慕はしき迄語るべしと雖も厭味なく遊女に混せぬ様武家は正しく町家はさら／＼と語るべき物也

○遊女とは神崎の梅が枝高尾の如き又小春の如き何れも遊女なれども是も時代と性質によつて氣韻も違がへは風儀も異なれば通例世帯女房の如くならず共隨分言葉附いやみあつて何んとなく底にきつぱりしたる處ある心得にて語るべき物なり

○娘にも姫君あり只の娘あり貴賤の別あれども等しく十五六より二十前後の女子あれば總て愛くるしくて如何にもなつかしげに物やさしく務めて未通育ちの眞情を寫すも務むるもの也

○子供とは先づ淨瑠璃に顯はれたる者ハ三四才より男女の別なく十三四迄を子供とすれば千松の如きもお鶴の如きも孰れも子供也總て愛らしくいとしげに語るべき者なれども殊更に附けたるが如

く小供の物真似はよろしからず、音聲の鼻が、りに素直らしく、子供の心を語るべきもの也

○敵役 とは先一部の淨瑠璃中主格の重なるものにて、假令ば金毘羅利生記の源太左衛門彦山の徹座、彈正の如き性質もより世話時代の別もあり、何れも全様ならずと雖、總て言氣をあたふなしに、傍若無人に荒き言葉を以て、底意地悪く語るべしと雖も、柄にもあき太き聲を無理に氣張り出すは宜ろしからず、前述の心得を以て物に寄り事に觸れて其精神を感せしむる様語るべきものなり

以上の外船頭に藝妓僧侶に神主山樵に漁師丁稚に番頭下婢に下男杯、世上にありと有らゆる人間畜類造種々の心得ありと雖も、右に列する如く、宜敷性質を吟味し作者の丁見を汲別け、務めて聴衆に感動を起さしむる様、精神を打込み語るべしと雖も、自分の所思を語たらず、宜敷先輩の語る處、我が師匠に習得たる在來の模範を失ふに於て

は、竹本義太夫杯の定めある本意を損ふに至るべければ、充分注意すべし、又他人の聲が宜き、連真似るべからず、真似るは必ず惡き癖の模るものにて、彼が妙所は彼一人天然に得たる長技なれば、師匠と雖も惡聲も有り、務めて其語る所の精神を採る事に務むべき者とす

第六章 發音の事

右に連記するが如きは普通の知覺を備へたる人は心得ざる筈もなく、又淨瑠璃を學ばんとする位の人には自ら承知せらるゝに相違なしと雖も、初心者は先づ第一着に右を心に考ふる杯の事はあらず、無上に呻なりさへすれば糸の調子に乗る乗らぬに關せず、宜き事と思ふのみあれば、予が階級稽古法に就ては是非共列記するの必用を感せしなり、尙ほ本節には進んで稽古上の心得を説明せんとす、是れ管々しき厭ひなきにあらずと雖も、能く服膺せられん事を希望して止まざる故なり

第一 我が音聲美しく、地合を語るに何れの節もさして難義ならず

と雖も、大体の規則よりはあまり引ッ張るへからず、引張れば自然に地合ならびて納り附き難く聲美くまき連聞き人は早倦怠するものなれば、或は長く或は短く緩く早く其抑揚に注意すべきものとす

第二 殊更に婆々なればとて爺々なり、逆或は小兒なり逆娘逆聲をくろまし又は似せ又はつくるべからず、我持前の音聲に情を含み心を包みて語るべきものとす

第三 けれども云ふ事あり即ち字義は外連決と云ふ、往古岡太夫筑前の椽に習得して後年其音聲一二の音次第に甲斐なくなりければ遂に規則にもなき寸法を以て繰り上繰り下繰り、縦横自在に軽く廻して丁ど受くる坏根か儘かなる業前を以て面白く綾なそにあれば聴衆非常に感じて當今に至るも彼れが語りたる淨瑠理の中には其れが元節と成つて傳來ると雖も、我音聲のよく廻る逆大体の元ふしを失ひ勝手に自儘に節を拵ふべからず、けれども多き淨瑠理は眞味薄く早

好きはすれ共、忽ち倦かるゝものとしるべし

第四 産字とは送り又はゆりあがしに假令は入りにけるなれば、るを(う)と云ひ何々としてなれば、るを以て引張るべし、即ちる(を)は(あ)は(を)かは(あ)の如く、總て右の如く準じて語るべし

第五 抑も音聲は誰にても各々應對するに平常の言葉は、何れも細きと太きに關せず全様に聞かゝると雖も、歌にまれ祭文にまれ若き聲は聞悪きものあり、(若き聲とは咽喉のふき切れぬを云ふ也)されば如何にして聞き能き聲を出ださるゝやと云ふに稽古に掛つてより如何なる人と雖も先づ一年を経ざれば聞きよき聲は出ず、尤羅り市をふる人か平常音聲を高く遣ふ人なれば兎も角糸に乗る聲は出ぬものなり、諺に貧困に育ちたる人は幼年の時泣けば逆わめけば逆富家の如く直様乳房を含くませて涙を止むる坏の事はあらざれば貧兒は成年の後自然に咽喉にさびありと云が如く泣立て吹切りたるが

故なれば也。されば良家の令嬢賓客の前に出て、琴をかなでうたを唄ふに、大体調子外れの變手子言ふべからざる音聲を出す之れ、稽古の足らぬ處によるも多けれど、先づ右に述ぶるが如き因縁なれば、其心を以て寒に入れば寒風に向つて聲を磨く、種種々の法あり然し、是は商賈人ならでは鳥渡行へぬものなれば、通例は稽古にこるより外なし、即ち稽古中の心の中に他の事を思ふ、觀念なく、眞一方に師匠が發音の工合を考へ、咽喉にかます齒を挾ます舌にからます糸の音色を篤と聞分け聲の出る體を亂さず、備を正して、自分勝手に品を附けず、ゆらでも宜き處を上げ下げせず、務めて腹一ぱいに語るに於ては、自然に其妙所を早く會得し、發音の調子を得るは別段難き事にあらざる也。

以上を詳知して、尙知らすべき事夥敷有れ共、徒らに長文に渉るの嫌あれ、其二三を摘記して、本章は是れにて筆を措くん、扱前條も述

べたる体の備へとは第一心を臍下に沈め、膝を割つて頭と胸部を直に置き、見臺に向つて正しく坐するを備と云、又間拍子を飾らん、逆無闇に張扇子を使ふべからず、淨るりは我聲の調子より低きをわめども、一二三の音を正し、咽喉も腹も盡くる程語らず、最初二の音より一三に通はすべき心得を以て程よく語るべし、世に五色の聲を出すに云ふ事あり、五色の聲とは赤黒青黃白なり、黃青白は先づ厭やな聲也、黒はさびあつて眞目を持つ赤は奇麗に美しく、花やかあるを云ふなれば、淨瑠璃には黒赤の二音を調へ、尙威張る聲は宜けれと間違ふて氣張となる事あり、謹み第一の事なりと心得べし。

第七章 節附の詳解

徒らに正本の節を知らず、多く年月を経ると雖、只冊數を重ねるのみにては何の詮もなき事あれども、此正本の節、即ち元祖竹本義太夫及び其他の太夫が打たる物も、至極慥かなるに相違なければ、目下語る處のも